

〔「開館60周年記念コレクションの歩み展Ⅱ」によせて〕

大和文華館コレクションの中のコレクション

大和文華館の所蔵品は古美術が中心ですので、制作されてからすぐに大和文華館の所蔵になったのではなく、人から人へと大切に伝えられてきたものがほとんどです。つまり、当館の所蔵になる前は、どなたかのコレクションの一員でした。1946年の財団設立時から蒐集を積み重ねてきた当館の所蔵品の中には、様々なコレクターのまとまったコレクションも含まれています。ここでは、比較的点数の多い六つのコレクションを紹介したいと思います。

一つめが、よく知られている原三溪コレクションです。生糸の貿易などで財をなした近代実業家で大コレクターとして知られる原三溪氏(1868～1939)の膨大なコレクションのうち、「寢覚物語絵巻」「一字蓮台法華経」「佐竹本三十六歌仙絵断簡 小大君像」などの重要な作品14件を1948年に原家より購入しています。また少し遅れて、伝周文筆「山水図屏風」と伝趙令穰筆「秋塘図」の2件を、1956年と1959年に購入しています。これらの計16件の原三溪旧蔵品は、国宝2件、重要文化財13件、重要美術品1件と傑作揃いでした。1960年に開館した当館の記念すべき第1回展では、そのうち15件が出陳され(残りの1件も展示替で出陳)、現在でも当館の所蔵品の核となる作品たちとなっています。

二つめは、近藤家の富岡鉄斎コレクションです。愛媛県松山市三津浜で海運業を営む石崎家の番頭であった近藤文太郎氏は、富岡鉄斎(1836～1924)の妻・春子が愛媛出身であったことなどから鉄斎と親交があり、文太郎氏が鉄斎に海産物を送り、鉄斎が文太郎氏に丁寧なお礼状と書画作品を送るというような付き合いが長年ありました。この近藤家の鉄斎コレクションの研究調査が当館によって行われ、1962年

12月1日から翌年2月10日には、その成果を披露する展覧会「近藤家所蔵富岡鉄斎展」が開催されました。そして1965年には近藤家の鉄斎筆の書画48件と書状98通が一括して当館の所蔵となり、翌年には「大和文華館富岡鉄斎展」と題した展覧会を行っています。当館の所蔵品は先述したように古美術が中心ですが、少し毛色が異なる鉄斎展は人気があり、数年に一度、定期的に鉄斎展を開催しています。当館所蔵の鉄斎作品は、近藤家以外からの購入品も数件あり、近年では六曲一双の「古木図屏風」が寄贈されました。

三つめは、アメリカ合衆国カリフォルニア州のオブライエン夫妻の根付コレクションで、1971年に17件の根付が当館に寄贈されました。このいきさつについては、『美のたより』18号(1971年秋)に載っています。開館式にも出席されるなど当館に親しんでいたオブライエン夫妻が、日本独特の工芸品である根付のコレクションが当館にないことを知られ、自身のコレクションの一部を割愛して寄贈されたといえます。妻のメリー・ルイス・オブライエン氏は、根付蒐集の手引書“NETSUKES: A GUIDE FOR COLLECTORS”を1965年に英文で出版されるなど、知識が豊富な根付コレクターでした。この手引書は10版以上も版を重ねており、多くの人に読まれました。当館の所蔵となったオブライエン夫妻旧蔵の根付には、一つ一つに小さな黄色の紙片が付属しています。たとえば、少年が籠を抱える様子を表した根付(図1)に付属する紙片には、「HOJITSU/mid-19th c./Boy, cricket cage/ivory」と記されています(図2)。HOJITSUとは写実的な人物根付を得意とした法實のこと、mid-19th c.(19世紀半ば)は法實の活躍時期、Boy, cricket cage

(少年と虫籠)は根付の主題、ivory(象牙)は根付の材質を表しています。いずれの紙片にもこのように、根付作者の名前(銘)、活躍時期、根付の主題、材質が英語で記されています。メリー・ルイス・オブライエン氏の手によるものと考えられ、根付への深い理解が窺えます。また、1979年にはアメリカ合衆国ニューヨーク州のハロルド・J・ジョーナス氏の根付コレクション(エルランゲル・ジョーナス・コレクション)40件も寄贈され、当館の根付コレクションが充実しました。

四つめは、中村直勝氏の古文書コレクション(双柏文庫)です。中村直勝氏(1890～1976)は、京都女子大学教授や大手前女子大学学長を務めた歴史学者で、中村氏の蒐集した中近世の古文書のうち664件が1973年に当館の所蔵となりました。1974年、1975年、1977年に双柏文庫展第1回～3回を開催し、主要な作品が紹介されています。双柏文庫には書を善くした公家や著名な茶人たちの書状が多く含まれるため、当館の「書」や「茶の湯」関係の展覧会などで活用されています。

五つめは、鈴鹿家の写本・刊本コレクション(鈴鹿文庫)です。鈴鹿家は京都吉田神社の社家で、特に幕末の鈴鹿連胤(1795～1871)は勉学に優れ、神官・国学者・歌人として活躍し、蔵書家として知られていました。この鈴鹿家に連なる鈴鹿義一氏に伝わる写本・刊本6163冊を

近鉄が購入し、1961年に当館に移管されました。当館の鈴鹿文庫には鈴鹿連胤が書写した本が多く含まれており、歌書が充実しているのが特徴です。なお、鈴鹿家の蔵書は、鈴鹿三七氏を通して愛媛大学附属図書館にもまとまって伝わっており、同じく鈴鹿文庫と呼ばれています。

六つめは、川勝政太郎氏の拓本コレクションです。川勝政太郎氏(1905～1978)は日本の石造美術研究の第一人者で、各地の石造美術を世に紹介されました。近鉄の囑託として、大和の古美術調査も行っています。川勝氏の採取した拓本1272件は、近鉄の歴史教室を経て2000年に当館に移管されました。現在重要文化財に指定されている石造美術の拓本などもあり、注目されます。

鈴鹿文庫と川勝コレクションは、これだけで展覧会を行ったことはありませんが、たとえば「茶の湯の美術」展(2019年)で、茶についての重要な記述のある歴史書として、鈴鹿文庫の『日本後記』『東鑑』を展示したり、「信仰と絵画」展(2011年)で、マニ教の図像と類似する仏教の図像例として川勝コレクションの東大寺大仏蓮弁の拓本を展示したりするなど、活用しています。

開館した1960年以降の蒐集品に注目する「コレクションの歩み展Ⅱ」では、二つめから六つめのコレクションの中からも貴重な作品を数点ずつ展示いたします。(宮崎もも)



図1

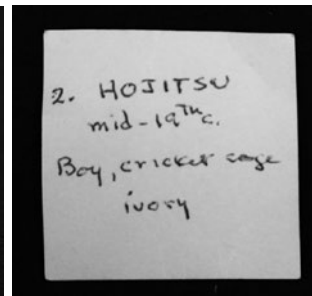


図2

季刊 美のたより No.210

令和2年4月4日

発行 大和文華館